

ひきこもり生徒と家族をつなぐスクールカウンセラーによる相談過程

黒 水 るみこ

The Consultaion and counseling Process of School Counselor between Hikikomori students and their Families.

Rumiko Kuromizu

(2011年11月25日受理)

I 問題と目的

本事例では、義務教育時のひきこもり生徒やその家族に対して、スクールカウンセラー（以下、SC）が訪問活動（アウトリーチ）で面接を実施し、当事者と家族の相談過程を検討するものである。ひきこもり生徒やその家族に対して、学校臨床の訪問活動（アウトリーチ）のマニュアルは存在せず、教員やSCが各々で家庭訪問を行っているのが現状である。また、不登校事例を対象とした訪問については学習指導などさまざまな活動・実践が報告されてきた（長坂,1997）が、不登校から移行したひきこもり臨床のSCによる訪問研究は概観するかぎり非常に少ない。これらのことから、義務教育時のひきこもりにおいて、専門家（SCなど）が行う訪問活動（アウトリーチ）のマニュアル作成に資するものとして、本事例を詳細に報告する。

ひきこもり支援の取り組みについて、一般に保健所や福祉関連のケースワーカーらが主に訪問を行っており、SCであることは少ない。しかし、義務教育の中で不登校からひきこもりへと移行した場合、関連機関に「つなげる」役割としては、保護者を別にすると学校の教員やSCが一番近い存在である。ひきこもり臨床において、当事者や家族が地域の社会資源を知らない、または社会資源を知っているものの敷居が高いなどの意見が多くあり、社会資源を活用せずに家庭でひきこもりを抱えている家族は多いと推測される。例えば斎藤（1999）は、「引きこもりを抱える家族は、相談先も無く、本人を抱え、地域社会から孤立状態で「2重の引きこもり」状態に陥っており、ひきこもり当事者と家族の両方の支援を行うことの有効性がある」と示唆している。黒水（2011）は、「ひきこもりが長く続いている生徒

の対応と保護者のサポートを行ったところ、家庭訪問を実施して家族全体を支援していくことで改善がみられ、複雑な背景をもつ家族への心理的サポートの必要性がある」と指摘している。このことから、ひきこもりを抱える家族への間接的なアプローチは当事者への支援につながるといえる。しかし、自宅を訪問するという活動には、当事者に対して侵襲の強いアプローチになる場合であることを十分に認識しておく必要がある。不用意な訪問が、訪問者が帰った後で家族に激しい怒りを向けるケースや当事者が訪問者に危害を加える可能性もあり、かえってひきこもりを悪化させてしまうことも念頭におかなくてはならない。教育分野で実践されてきた訪問という介入手段は、さまざま議論されてきた（田島2001）。しかし、学校臨床の訪問活動（アウトリーチ）のマニュアル作成までには至っていない。近年、厚生省はひきこもり現象の標準的な指針の必要性が急務であることから、新ガイドラインを改正し、ひきこもりの定義や訪問活動（アウトリーチ）等も見直された。そこで、本事例では近年のひきこもりの定義や改訂ポイント等について論述し、ひきこもりと不登校の関係を明らかにした上で概要を検討していきたい。

1.1 ひきこもりの評価・支援に関する新ガイドラインについて

2010年5月に厚生労働省は、「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」を公示し、ひきこもりはメンタルヘルスの問題であり、地域関連機関ネットワーク、訪問支援や就労支援などを組み合わせた段階的な支援が必要であるという指針を示した。その新ガイドラインの中でKoyama（2010）は“1660名を対象とした調査で、ひきこもりの生

涯有病率を1.2%とし、ひきこもり状態にある子どもをもつ世帯は全体の0.5%であり、現在のところ255.510世帯、少なくとも255.510名である”と述べている。今回の公示により、新たにひきこもりは「様々な要因の結果として社会参加（義務教育を含む就学、非常勤職を含む就労、家庭外での交遊など）を回避し、原則的には6カ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態（他者と交わらない形での外出をしてもよい）を指す現象概念である。なお、ひきこもりは原則として統合失調症の陽性あるいは陰性症状に基づくひきこもり状態とは一線を画した非精神病的な現象とするが、実際には確定診断がなされる前の統合失調症が含まれている可能性は低くないことに留意すべきである」と定義された。

新ガイドラインの改訂ポイントを2点にまとめると①支援の必要性：ひきこもり状態の子どもや青年がすべて社会的支援や治療を必要とはしていないが、支援が必要とする例として、社会参加の回避が長期化し、社会生活の再開が著しく困難で当事者や家族が大きな不安を抱えるようになった場合（家庭内暴力や神経症、精神病の症状など）があげられている。②精神病の症状との関係：統合失調症とは区別はされるが、ひきこもりの統合失調症の診断前の状態に含まれている可能性があり、精神科医などへの早めの受診や相談が必要とされており、確定診断がなされる前に相談や支援を行なうよう留意すべきとされている。しかし、ひきこもりが表面化することの難しさから、病院受診までに時間がかかり、ひきこもり早期発見・初期対応についての対策が必要である。また、アウトリーチ（訪問活動）にかかる人員も不足しており、教育・福祉・医療と地域で連携し、制度的な支援やスキルを行なっていくことの必要性が先行研究より明らかになっている（齊藤，2000，2007；齋藤，2004；山本，2004；竹中，2007；伊藤，2003a；木曾・堅物・小松・倉本，2001；）。

全国引きこもり KHJ 親の会（家族連合会代表：奥山雅久）は、「仮にひきこもりが100万人とすると年間1兆円の生活費が必要となり、10年後には大変深刻な事態になる」（平成22年内閣府「障害者制度改革推進会議」）と発言しており、このような事態防止のために早期の人員の確保と制度化が求められている。この早期の人員確保の課題は、本事例の義務教育校配置のSCが活動範囲を広げて、訪問活動（アウトリーチ）を実施することで人員確保の制度化の足がかりとしたい。次節では、ひきこもり臨床の早期対応について、ひきこもりと不登校の関

係について検討する。

1.2 ひきこもりと不登校の関係

2010年福岡市で行なわれた、ひきこもり青少年社会参加支援事業のアンケート調査の結果（回答140名、平均年齢27.6歳）によれば、ひきこもりのきっかけとして①不登校（小・中・高校）47%、②人間関係の不信40%、③病気29%、④いじめ28%、⑤職場不適応25%（重複回答あり）としており、主に人間関係から生じる環境不適応が大きな要因になっている。不登校との関係については、義務教育時の不登校から引き続いてのひきこもり者は20%となっており、継続率は高くはない。しかしながら伊藤（2003b）の調査（回答3293件、平均年齢26.7歳）で、“ひきこもり者の33.5%は小・中学校の不登校経験があるという統計が出ており、ひきこもりと不登校との関連を今後検討していく必要がある”と述べており、また新ガイドラインにおいても、不登校のうちにはひきこもりと関連性が強い一群が確実にあると問題視されており、早期対応や予後研究の必要性を指摘している。

以上のことから、ひきこもりと不登校の関係は無視できないものであり、特に義務教育時の不登校からひきこもりへ移行した初期段階において、早期の支援介入が必要であると考えられる。このことから、義務教育学校配置のSCが新ガイドラインを参考にして訪問活動（アウトリーチ）で面接を実施し、早期介入による当事者と家族の相談過程を明らかにし、その効果と今後の課題について検討することを目的とする。

II 事例の概要

1. 個人情報保護と論理的配慮について

本事例の個人情報は、学術研究の目的のみに用いることを確約しており、本人や保護者、A中学校関係者に同意・協力の許可及び論文掲載の了承を得ている。また、個人名・学校名はアルファベットで記入し、時期も明記しないことで論理的配慮の対策をとっている。

2. 対象生徒：A 14歳 男子

ひきこもり歴：8カ月

3. 問題の発生と経過

Aの在籍する市立A中学校では、市内中心部から郊外に位置し、校区内には閑静な住宅街であり、比較的落ち着いた中規模学校である。不登校数は

県内平均であるが不登校対応教員を配置しておらず、不登校・ひきこもり対応は主に養護教員とSCで行っていた。A中学校では不登校からひきこもりに移行した2名の生徒が在籍していたが、担任はひきこもり生徒と「会えない」という理由で手立てがない状態であった。本来、義務教育時の相談は学校のカウンセリングルームで行なうものとされているが、ここ数年はSC業務の多様さから、SCが家庭訪問を行う業務が増えてきており、当事者とコンタクトをとるには訪問活動（アウトリーチ）に行かざるを得ない状況であった。

（母親からの情報）

200X年4月に母親と面接。200X-1年の夏に父母が離婚し、200X-1年9月にF市に引っ越したことを機に不登校になり、その後学校へ登校していない。当初の不登校の理由は「友達がいらない」ことであり、母親が車で学校へ送っても車から出られない状態が続いていた。本人に徐々に身体症状が出始め「学校が怖い」「学校へ行くと具合が悪くなる」ことから、無理に学校へ行かせずに様子をみている状態である。200X年3月から家族に対して反抗的な態度を示すようになり、母親や妹に対して暴力を振るうようになってきた。200X年4月から子犬を飼い、世話をするようになってから、家族に対しての暴言や暴力は減った。本人は母親に対して「離婚に納得していない」「無理やり友達から引き離された」と話しており、母親は自分に責任はあると感じつつも本人に「どう接していいかわからない」状態であった。病院の受診に対して「レッテルを貼られるのが嫌だ」と抵抗感がある。

（学校からの情報）

担任は「家庭訪問に行ってもまったく会えない」ため、手だてがない状態であった。担任は、学期ごとに母親と話し合いをするように心掛けていたが、「本人が学校に対して恐怖がある」ことからプリント配布をすることで「本人が学校に行かなくてはいけないというプレッシャーを感じるのではないか」と悩んでいた。担任は母親と連絡が取れているので支援機関と連携は取っていない状況である。

4. 家族歴および成育歴

母方祖父、母、妹（小6）、本人の5人家族である。生育歴は特に問題なし。幼少の頃より、人見知りで大人しい子どもでもあったが、小・中学校時には不登校しぶりの様子は見られなかった。200X-1年に父母は離婚し、本人は父親と連絡をとっていない。

5. 期間：200X年4月～200X+1年5月（1年1カ月）相談時間は#1#2までは約20分程度。#3以降の訪問は約1時間の時間設定とした。家族（母親）面接時間は随時、訪問後に約50分とした。
【相談場所】＜個別相談＞訪問時にて本人の自宅、特定の部屋、＜家族相談＞市立A校相談室およびカウンセリングルーム

【次の相談日の予約確認】SCは本人と次の訪問日を話し合って決めていった。相談日の間隔は約2週間から1カ月である。その際にメモを本人と家族分の2枚用意し、家族分は本人から手渡してもらうようお願いをしていた。メモには次の日時・宿題の内容を記した。本人はメモをいつも机の上に貼っており、古いメモは捨てずに空き缶のなかにためていた。母親はメモを冷蔵庫に貼って家族で見られる状態にしていた。

6. 相談過程の目標

当事者の意思だけでひきこもりの状態から抜け出すことは困難といわれており、適切な援助がなくては長期化しやすいのが現状である。当事者の現在のひきこもりの段階（図1）を確認することは支援を行う上で留意しておくべきことであり、引きこもりの段階ごとの特徴と対応（表1）に準拠した支援を行った。本人の現在の状態では「ひきこもりの持続」の段階（図1）で、社会との再会段階に入っており、「ひきこもり段階」（表1）に位置している。これらの時期を総称すると、開始期の不安定さがひとまず治まっていき、当事者も家族もひきこもりという状況にいくぶん腹を据えたように見える時期である（厚生省、2010）。新ガイドラインによる訪問実施前の準備段階で検討すべきこととして、①情報の収集とそれに通じた関係づくりを行うこと、②訪問の達成目標を明確に設定しておくこと、③訪問することを事前に家族や当事者に伝えること、④訪問の適切なセッティングをすること、④関係機関との情報交換することを基準とし、本事例の相談に臨むものとする。

本人の相談においては、情報収集や日常生活の把握が優先されることから①安否確認、②日常生活の把握と向上、③家族間のコミュニケーションの再構築、④ステップアップ訓練・自宅外での活動（目的地まで一人で行動するなど）を目標にする。

家族相談においては、齋藤（2004）は“家族の対応変化は、その後の本人に対する援助の導入部としての役割をもち、家族支援において重要である”と指摘している。このことから当事者と家族との信頼関係の回復として、家族間の会話の機会を除々に増

やし、これを通じて家族との信頼関係を取り戻せると仮定する。本事例の家族相談は①本人と家族のコミュニケーションの再構築（家族間の会話が増えるよう支援）、②カウンセリングによる家族の心理面の安定、③ひきこもり当事者に対して焦らず見守る支援を行うことを目標とする。

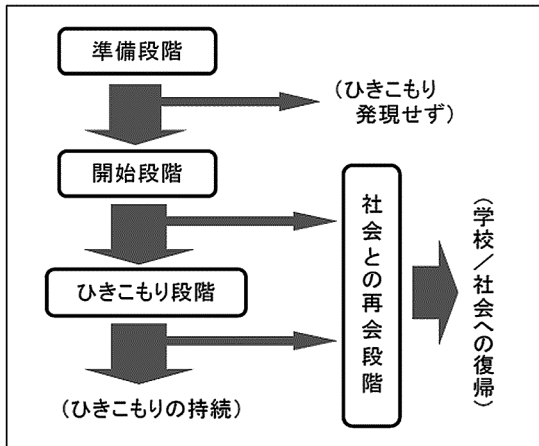


図1. ひきこもりの諸段階

(厚生労働省：2010ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン)

Ⅲ 相談の経過

重要と思われる面接内容を抽出して記載する。本人の発言は「 」, SCの発言は< >で表記する。

1. 本人の相談の経過

【第1期】「警戒心が強く緊張感がある時期」

< #1～#3 >

#1 SCは母親在宅中に訪問をし、玄関先にて本人と顔合わせをする。本人は廊下の柱に隠れ顔を少しだけ出して話を聞いている。<私は学校の先生ではないですよ>というときこちなく笑う。<これから家庭訪問をするけどいいかな？一緒に相談や勉強をしよう>と話すとかすかに頷く。

#2 SCは母親在宅中に訪問をする。子ども部屋にテーブルとコーヒー、座布団が用意しており、待機する。本人の部屋は妹と共有しており、本人のスペースは部屋の5分の1ほどのスペースであり、シーツやカーペットがなかった。妹のスペースと比べ、物が少なく隅に追いやられている状況であった。本人は犬の散歩に行ったまま帰宅しないので母親と一緒に近所の散歩に出かける。すぐに母親が空地の隅に犬と一緒に隠れている本人を発見し、自宅に連れ戻す。本人はSCの正面に座り、

表1. 経過の段階ごとの特徴と対応

(厚生労働省：2010ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン)

段階	特徴	対応
準備段階	身体症状や精神症状や問題行動などの一般的症状が全景に立つ時期	顕在化した症状のケアなどを通じて子どもの心の訴えに耳を傾け対処すべき
開始段階	激しい葛藤の顕在化、家庭内暴力などの不安定さが目立つ時期	当事者には休養が、家族やその他の関係者には余裕が必要な時期であり、支援者が過度に指示しすぎないことが肝要
ひきこもり段階	回避と退行が全景に出て、葛藤は刺激されなければ目立たない。徐々に回復していく場合もあるため、焦りに基づく対応は避ける。しかし、何の変化もみられないままに遷延化する徴候が見えたら積極的な関与も考慮すべき時期	焦らず見守る、性急な社会復帰の要求は避ける、家族の不安を支える、適切な治療・支援との出会いに配慮が必要
社会との再会段階	試行錯誤しながら外界（多くは中間的・過渡的な場）との接触が生じ、活動が始まる時期	子どもの変化に一喜一憂せずに安定した関わりを心がける（家族が焦って登校刺激や外出刺激を行う傾向がある）

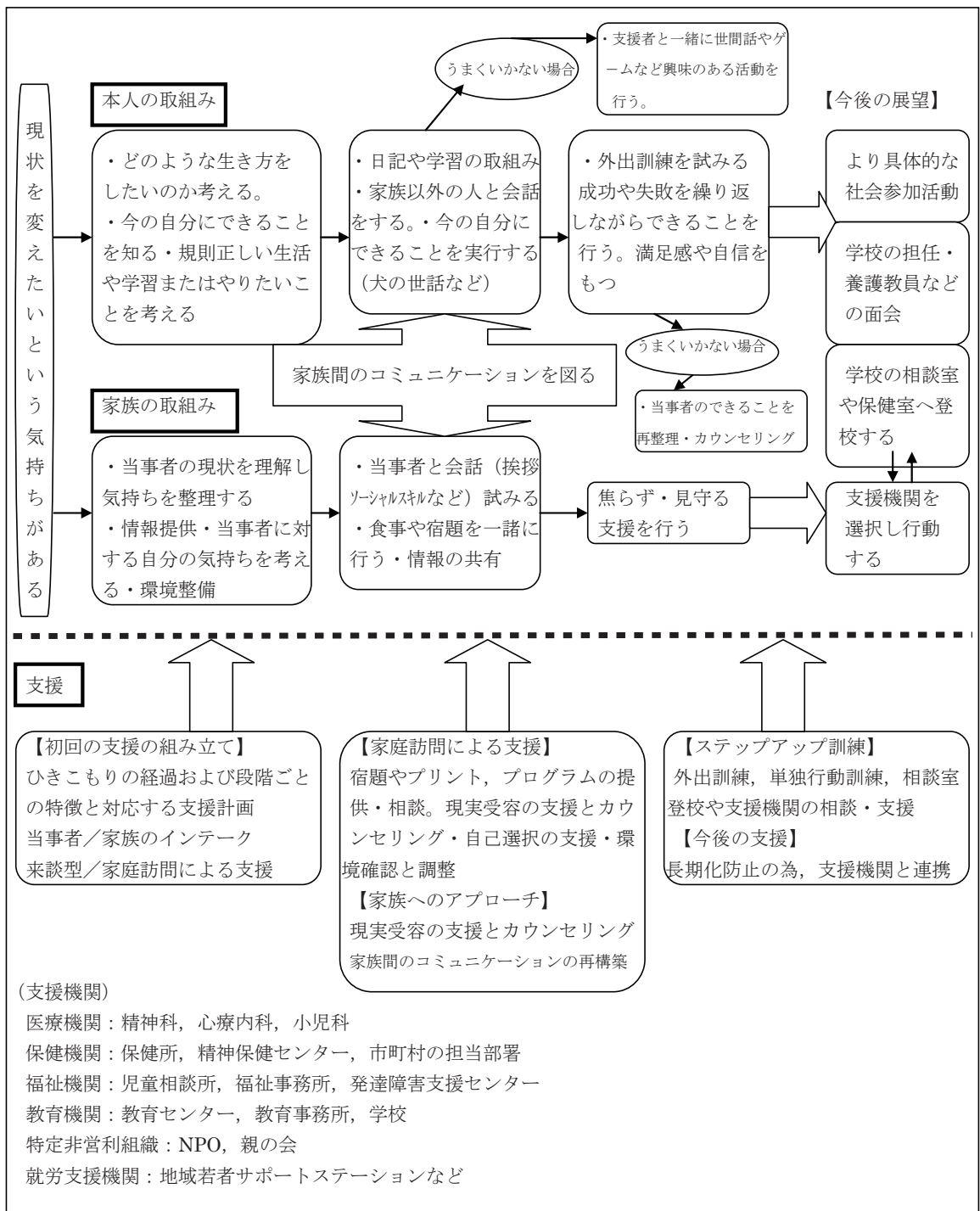


図2. 社会参加に向けた当事者本人・家族への取組みと支援の流れ

俯いたまま黙り込む。＜無理に面接はしないし、嫌であつたら強制はしないよ＞と話すも黙って頷く。日常生活の話聞き、＜犬の散歩は毎朝行くの？＞本人は頷く。最近飼い始めた子犬の話にな

ると目が輝く。＜いつもはどんなことをして過ごしているの？＞本人の返事はない。自分のことになると顔が曇る。そわそわと落ち着きがない状態であつた。毎朝、犬の散歩のために起きており、

昼夜逆転の生活はしていない様子であった。

- #3 (部屋のスペースが広がっていたことに對して) <部屋が広がったね> 「はい」と少し笑う。本人は緊張して表情が張りつめているが会話には応じる。担任から預かってきた漢字プリントと一緒にする。筆圧は強めにきっちりとした字をマスに埋める。<今日は何をしたの?> 「いつも暇だ」「昼間は犬の散歩に行くけどあとはすることがない」とぶっきらぼうに答える。<どのような生き方がしたい?> 「普通に生きたい」と漢字プリントをしながら小さな声でいう。

【第2期】「日常の個別活動への取り組み」

<#4~#6>

(個別活動内容) 犬の観察日記、数学ドリルと宿題ノート2冊(常に宿題をしている状態にしたいために2冊用意し、1冊ずつ交互にSCが学校へ持ち帰り、教科教員が採点をした)、#5以降、ゲームやパズルを準備(日中に一人でできる活動として母親が用意)

- #4 本人が自ら玄関まで出迎え、笑顔で挨拶をする。宿題は約束のページまでしており、自慢げな様子であった。<よくできたね>とほめるとはにかんで笑う。数学の計算問題(中1レベル)と一緒に行ったが、本人は指導がなくてもスラスラ解けている。「数学は得意だ」「勉強頑張る」と前向きな様子であった。<宿題は無理をせず、暇だと思うときにやってみよう>と提案し、犬の観察日記と数学ドリルの数ページを宿題に出す。

- #5 本人は宿題を忘れずにしており、犬の観察日記は毎日欠かさず写真付きで書いていた。宿題をしているので母親からご褒美に買ってもらったパズルを一緒に行く。本人は「この間、文章問題でわからないところがあったから、お母さんに聞いた。けど、お母さんもわからなかった」「宿題は妹と一緒に茶の間でしている」と嬉しそうにしゃべる。

- #6 親戚の結婚式があり、本人は直前まで迷ったが結局行けなかった。母親や妹から「なぜ行けないのか」と言われ、逆上し物を放り投げて泣き叫んだと事前に母親から話を聞いたが、本人はその話に触れず、いつも通りに勉強をする。<困ったことはない?> 「別にない」と答える。

【第3期】「個別活動と自分を語る時期」

<#7~#10>

- #7 中学校の各教科担当者から宿題ノートに本人へのメッセージをお願いした。本人はそれを見ながら「ふうん、みんな俺のこと覚えてるんだな」と嬉しそうにつぶやいた。また、数学の先生は解

き方の解説を詳しく記入しており、一人でも解きやすい工夫がされていた。<最近、困ったことはないか?> 「別にない。…けど(しばらく間があく) …学校に行っていたとき、すごく嫌だった。学校に行かないと伯父さんがやってきて無理やり車に連れ込んだ」「言うことを聞かないと殴られた」<それはつらかったね> 「うん」と素直に返事をする。

- #8 勉強をせずに伯父の話を語る。「あいつは馬鹿だ。どうしようもない馬鹿だ。俺はあいつのことが嫌いだから、来たらすぐに逃げる。顔を会わすのもいやだ」と伯父に対する文句を長々としゃべり、一息つく。「あいつさえないなかったら、俺は今、学校へ行ってる」<あいつって誰?おじさん?>返事をせず黙り込む。その後、ゲームとパズルを一緒に行くが何かを考えている様子でゲームに集中していない。

- #10 「今日は勉強をする気がない」というので一緒にパズルを行う。パズルの間、妹や母親の話になり「妹は馬鹿だ。いつもちょっかい出してくる。お母さんは嫌いじゃないけど…みんな俺のことを馬鹿にする」と最初は口調が早く、次第にゆっくりとなり「俺はダメなんだ。」と暗い表情になる。<そんなことはないよ> 「いや、本当にダメなんです」<どうしてダメなの?> 「考えたら落ち込む」<あんまりきつかったら病院へ行ってみることもできるけど> 「いや、それだけはいいです」と病院受診は気が向かない様子であった。

【第4期】「家から外へ 自己統制と葛藤」

<#11~#15>

- #11 次回の相談はSCに用事があり、訪問できないので配布プリントを学校(相談室)に取りに来てくれないかと提案する。もし来れないようだったら、事前にSC専用学校携帯に連絡をするように伝える。本人は「うん。行ってもいいよ」と気軽に答える。

- #12 本人から電話連絡。「今日は具合が悪いので行けません」<大丈夫?> 「はい、病院へ行きます。大丈夫です」本人の声は明るくハキハキとしていた。

- #13 訪問に行くと本人はイライラした様子で待っていた。乱暴にノートを机の上に置くなど行動が荒々しかった。<この間から体調はどうかな?> 「まあまあです」「喉が渇いたけど、ジュースがない」とぶっきらぼうに答える。<今はあまり人がいない時間だから、良かったら一緒にジュースを買いに行こうか?> 「え?」驚いた

顔でこちらを見る。「一緒に行ってくれるの？」
<今から近くのコンビニに行きましょう>と伝えると「やっぱりいい」といい、勉強を始める。しばらくすると勉強やパズルをしながら、ちらちらとSCの方を見る。SCから<どうしたの？>と聞いても「別になんでもない」と答える。

#14 玄関先で挨拶をすると、「今からコンビニに行きたい」というので一緒に行く。ジュースやお菓子などを購入して自宅へ戻る。その後、「俺はコンビニに行けた」といいながら宿題をする。<すごいね。今度はお母さんと一緒に買い物に行ってみたら？>「誰もいない時間だったら行けるかもしれない」という。その後、ゲームとパズルを行う間に「絵日記はもう飽きたから書かない」「宿題は数学だけでいい」と話す。

#15 昨日、早朝5:30に犬と一緒に一人でスーパーに買い物を行った話をする。「けっこう楽しかった」「俺はお手伝いをした」と満足げに話す。<それはすごいね>「犬も一緒に行った。スーパーの前につないでおいた。俺が戻ってくるとうれしそうに尻尾を振った」と笑顔で話す。

2. 家族の相談の経過（母親の相談情報）

母親の発言は「 」, SCの発言は< >で表記する。

#1（子ども部屋は2人部屋で妹とシェアをしており、本人のスペースが狭く本人の物もほとんどなかった状況に対して）母親に状況を話すと「Aは自分であれでいいっていうのです」というが、本人と話し合って対応を考えてもらうよう提案した。

#2（妹と同じようにカーペットとベットカバーを購入してもらっており、本人のスペースが広がっていたことに対して）「Aは遠慮するから、私達もこのままでいいのだと勘違いしていました。見て見ぬふりをしていたかもしれません。買物には一緒に行けなかったけれど、希望の色を買ってくるとうれしそうにしていました」「私の態度を見て妹はAを無視したり、嫌味を言わなくなったような気がします」「Aが学校に行かないことで、妹はAに「なんで学校に行かんとよ」と喧嘩になったら必ず言うていました」と家族間の様子が変わってきたことを話す。

#3（本人の宿題を茶の間で教えたことに対して）「宿題教えてって言うてきたので、茶の間で教えました。今の中学校の問題って難しいですね。まったく解けないのがあって、あとで先生に聞きなさいって言うてます」<少しずつですが変化が

出てきますね>「ええ。ご飯も茶の間にみんなで食べるようにしました。学校の話は出さないように気をつけていますが、妹は学校の話をしたいので…難しいですね」と話し、母親は家庭内の調整をしていることを伝える。

#4「あれだけケンカしていたAと妹があまり言い争わなくなりましたが、この間の親戚の結婚式に行けなくて逆ギレして泣き叫びました。私たちも問い詰めるような感じになって。言い方を考えなくてはいけないと思いました。私たちはAに対して上からものを言っていることに気が付きました。やっぱり、Aは外には人の目があるから行けないのですね」<でも最近はずごく勉強を頑張っていますね>「Aが宿題をして努力しているのがわかりました。喧嘩が少なくなることで、家の中が落ち着きますが、Aがこのままずっと家にいたらって思うと経済的なこともあるし、不安でたまらなくなります」と今後の不安を述べる。

#5（伯父から殴られた話について）「やっぱり話しましたか。学校へ行かなくなったときにもう私たちじゃ手に負えなくて呼びました。伯父はAに甘えるなって車に引っ張り込んだりしていました。でも殴ってはいないと思います。私は近くにいましたから。今も伯父が来たら、すぐに部屋に閉じこめます」<本人は殴られたもしくは同等の行為をされたと思っています>「今では私たちも無理じいはしません。最初が失敗したかもしれませんね」といい、今後の対応に対して話し合う。

#6（Aが登校できなかったことに対して）「今日はAが学校に行けなくてすみませんでした。やっぱり学校は無理みたいです。今朝、Aの顔を見たらイライラしていて「なんでイライラしてるの？」って聞いたらAは「知らん」「お前には関係ないやろ」って…本当に頭にきたので喧嘩になってしまいました」<本人の感情の起伏が激しく、不安が強いようなら病院を勧めますが>「病院はいいイメージがないので行かせたくありません」と本人同様に病院受診は抵抗感があると感じた。

#7（本人とSCがコンビニに行ったことに対して）「Aはコンビニに行けたことが本当にうれしかったみたいで、今度、買ってきてほしいものはないかって聞かれました」「コンビニくらいで…」と思ったけれど、Aにとっては大きいのですね」「Aがしたいことに対してちゃんと耳を傾けないといけないうですね」と、本人に寄り添う様子が見られた。

#8 (本人がスーパーに行ったことに対して)「一人でスーパーに買い物に行ったんですよ。もう1年ぶりかもしれません。」<どうやったのですか?>「人のいない時間は朝の5時だったらいいんじゃないかって話になって。買ってきてほしいものをメモして渡しました。」「誇らしげに『俺は買ってきてやった』と言われるとカチンとくるの

ですが、本人はお手伝いのつもりでしょうね」<よかったですね。ほめましたか?>「ええ。Aがひきこもりになってから正直、ほめることがなくなっていたのです。これで学校にも行ってくれたらいいのですが」というが、急な変化はかえって悪影響になるので焦らず見守る支援を続けるよう伝える。

表2. 本人と家族の相談過程

段階	本人の相談過程の様子	家族の相談過程の様子
【第1期】警戒心が強く緊張感がある時期	犬の散歩後、SCに会いたくないため空き地に隠れるが母親に連れ戻される。自分のことを話すことに抵抗がある。表情が暗く警戒が強い。SCに対して緊張があり、そわそわと落ち着きがない。	本人の部屋のスペースが非常に狭く居場所がない状況であった。本人のシーツやカーペットなど妹と同じように購入し部屋のスペースを広くした。
【第2期】日常の個別活動へ取り組み時期	宿題と犬の観察日記を妹と一緒に茶の間で行う。宿題の解らない箇所は母親に聞くことができる。親戚の結婚式に参加できず、逆上し物を放り投げて泣き叫ぶことがあったがSCには話さずいつも通りに勉強をする。	宿題・食事を家族で行うことで会話の機会を持ちコミュニケーションの再構築を図る。宿題をしているご褒美にパズルを購入した。家族は本人へ上からものを言っていたことに気が付く。日常的にあった妹との喧嘩が少なくなる。
【第3期】個別活動と自分を語る時期	(宿題のスペースに教員がメッセージを残したことに対して)「みんな俺のことを覚えてるんだな」という。学校に行かないと伯父から殴られた話を語る。「あいつさえいなかったら今頃学校へ行っている」「みんな俺のことを馬鹿にする。俺はダメなんだ」と発言する。	(伯父から殴られた話に対して)初期対応の失敗が露見し、本人の「殴られたこと」と事実との矛盾が生じる。家族は初期対応を反省し、今後の対応を思案する。
【第4期】家から外へ自己統制と葛藤の時期	家庭訪問に来てほしくない時は自分で電話をかけることができる。日によってイライラした様子を示す。ぶっきらぼうな態度をとるがSCとの会話には応じる。(一緒にコンビニ行くことを提案すると)一瞬驚いた表情をする。後日、自ら「今からコンビニに行く」といいSCは同行する。買い物は「誰もいないのなら行けるかもしれない」と話す。朝5:30に近くのスーパーで買い物をし、帰宅することができた。	本人からの自発的な発言に対して家族は見守りながら支援する。家族は本人の行動したいことについて協力し、できたことに対してほめる。

IV 考察

1. 本人と家族の相談過程について

(1)【第1期】「警戒心が強く緊張感がある時期」

<#1～#3>

ひきこもり期間8カ月の本人は、ひきこもりは6カ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態を指す現象概念であることを考慮すると、比較的支援が介入できる状態であった。近藤（2001）が“ひきこもりには不安感や恐怖感、緊張感、強迫症状、抑うつ、意識低下など不安障害圏や気分障害圏のさまざまな病像が見られる”と述べているように、本事例においても本人は当初、家族以外の人に対して警戒心が強く、緊張を伴っておりそわそわと落ち着きがなかった。しかし、SCが相談を行なっていくうちに本人の緊張は徐々に解けていく様子がみられた。#2で本人の部屋へ足を踏み入れると妹と2人部屋で本人のスペースは狭く隅に追いやられている印象であった。SCは母親に状況を話し、妹と同様の扱いをするよう相談し、家族で話し合うよう提案した。その後の#3で、本人の部屋は見違えるほど変化をしており、SCが介入したことで家族に変化を与える存在であると本人は感じたのかもしれない。齋藤（1999）によると、“ひきこもりが長期化している場合の部屋は、「本人の部屋」というテリトリーをみだりに侵さないこと、どれほど乱雑で汚い部屋であっても、勝手に入り込んで掃除をしたり、ゴミを勝手に捨ててしまったりせず、両親はまず、本人の部屋の空間的価値を尊重する姿勢を明らかにすること”と述べている。しかし本事例の場合には、妹と同じ部屋で生活していることから、対等の扱いを受ける必要性があったと考える。家族は部屋のスペースを検討するにあたって、本人と話し合いの機会を持ち、見て見ぬふりの状態から脱却したと思われる。

(2)【第2・第3期】「日常の個別活動への取り組み」「個別活動と自分を語る時期」<#4～#10>

この時期には、本人と家族のコミュニケーションの再構築を図るよう相談を行った。SCは本人の状態を確認し、「日頃することがない」ことから本人に宿題や観察日記をすることを提案した。このことから日常生活にメリハリをつけることができたと考えられる。#4では、本人と家族には一緒に食事と宿題、観察日記を茶の間で行う行動があった。本人にとって母親から宿題を教えてもらうことは、嬉しい出来事のように非常に熱心に取り組んでいた。また、妹と一緒に宿題をすることで自分も課題に挑戦しようと意欲を見せ、妹に対する兄の尊厳のような

ものが垣間見られた。このような経過から自然と会話も増え、兄妹の喧嘩は少なくなっていったのだと考えられる。齋藤（1999）は“ひきこもりの事例では、本人との会話の機会はしばしば極端に貧しいものになりがちで、本人との会話の機会を徐々に増やし、これを通じて家族との信頼関係を取り戻すことが大切である”と述べている。ひきこもり者への話しかけ作法として、齋藤（2002）は“コミュニケーションの会話に心がけるなら、「相互性」が必要であり、相手のいったことを聞き、理解して記憶し、その内容に見合った返答をすること、また親は「自分は変わらず本人だけ変えよう」と発想しがちだが「相互性」は会話を通じて相手も変わり、自分も変わることができるという意味もある”と示している。本事例においては本人と家族ともに現状を変えたいという気持ちがあり、家族の相談を行ううちに、齋藤（2002）のいう「相互性」が生じ、家族も初期対応の失敗を反省し「Aのことを上から見ていた」などの気づきが多く見られた。この家族の微妙な心の変化は表情や言い方に表れ、本人に伝わったと思われる。

#7で以前、担任は「家庭訪問に行ってもまったく会えない」ので手だてがないと感じていたが、SCの取り組みの報告により、間接的に本人の状態を把握することができ、宿題ノートに本人へのメッセージを残した。義務教育時には学校とのつながりは不可欠であり、本人の義務教育後の今後の進路を視野に入れると、学校とつながっていることは重要だと思われる。

さらに#7では勉強よりも「話すこと」に集中し、自分の中に溜まりこんでいたものを吐き出していった。齋藤（2003）は、“不登校における攻撃性は①不登校の発言状況とそれに関与した人物に対して向けられる怒り、②家庭内暴力、③受動的攻撃的不登校、④軽度発達障害児の衝動型不登校としており、不登校をめぐる“攻撃性”問題の第一の領域は不登校に関与した人物にむけられる攻撃性である”と述べている。本事例においても本人の不登校のきっかけは父母の離婚で引越すことになり、「離婚に納得していない」「無理やり友達から引き離された」と母親への怒りを滲ませて家族に暴言や暴力をおこしていた。しかし、家族に対する暴言や暴力は子犬の世話を任されたことから家族の役割を与えられ症状は落ち着いていき、蟬りの解消までは至っていないが治まりが見られていた。伯父から学校へ行くために無理やり車に率いられるなどしたために、さらに本人の姿勢は強固になってしまったと考える。本人は伯父から「殴られた」と認識してい

たが、家族の証言によると「殴られた」事実はなく矛盾が生じた。長い月日のなかで、本人は同じことを繰り返し考え、堂々巡りをしているうちに考えが凝りかたまっていたのではなからうか。また、相談の中で本人は伯父や妹に対して「あいつはバカだ」などの発言がみられ、感情の蟠りを他者に転嫁していった。このことはひきこもり者にはよく見られる傾向で、対人恐怖や強迫症状、被害妄想からくるものであると考えられる。本人の「あいつさえいなかったら…」の発言に対してSCが誰を指すのか聞いたところ、質問には答えず黙り込んでいた。本人にとっての「あいつ」は単に家族や伯父だけでなく別の意味も含むのかもしれない。また、「俺はダメなんだ」「みんな俺のことを馬鹿にする」「自分のことを考えたら落ち込む」などの発言から本人のプライドの高さと劣等感が感じられた。池上(2010)は、「いうことはいちいち立派なのに、人生にもまれた経験の少なそうなひきこもりの当事者をたまに見かけることがあり、ひきこもり当事者のなかに、高学歴でプライドの高い人が多いのもこうした「自己万能感が傷つく体験」をしてこなかったのではないか」と述べている。本事例も本人のプライドの高さが自分を追いこみ、傷ついたときに自己否定に陥ったようになったのではなからうか。本事例においても、このような症状からSCは病院受診を勧めたが、本人と母親共に病院に対して抵抗感を示したので、時期をみて今後も根気強く勧めていきたいと考える。

(3)【第4期】「家から外へ 自己統制と葛藤」

＜#11～#15＞

第4期では社会との再会段階として試行錯誤しながら外界(多くは中間的・過渡的な場)との接触が生じ、活動が始まる時期(表1)とし、外出訓練や単独行動訓練の過程について述べる。前提として本人の状態が安定していることとし、対処としては子どもの変化に一喜一憂せずに安定した関わりを心がけた。工藤(1997)は、「引きこもり者の特徴として、社会的・心理的に未成熟な人が多いことを指摘し、就労や対人関係経験などの社会体験をつむことによって支援が成り立つ」と述べている。本事例においても次の段階としてステップアップ訓練・自宅外での活動(目的地まで一人で行動するなど)を目標としており、対人関係経験などの社会体験に触れ身体を慣らすことは学校や病院など、さまざまな場所へ移動できる道筋になると考えられる。また工藤(2001)は“ひきこもり者の家族の力だけでは改善はせず「他者の必要性」を述べ、従来の不登校生徒・児童への「悩みに寄り添うこと」「自己決定

を待つこと」よりも援助者側の「積極的」介入無しには問題が解決しない」と指摘している。このことから本人の日常生活に対してSCが介入した結果、#12と#13で本人の揺れ動きが見られた。#11で学校の相談室へくるよう提案していたが、#12で登校できないことを電話連絡してきた。このことは予想していたが、まだ学校に対して不安材料が多くあり、心と身体の準備ができていないと思われた。その後いままで見せなかったイライラとした様子を表し、ぶっきらぼうな態度から心の葛藤が見られた。このような反応は出ていたが、本人が外へ出なくなっている気持ちを大切に、より外へ行きやすい場所へ変更する必要があると考え、別の場所(コンビニ)を提案した。本人はSCとコンビニに一緒に行くことは予想もしなかったようで驚いた様子であった。#14では、本人は#13から次の相談までの間、外へ出ることを考えていたようで、SCが玄関先で挨拶をすると、「今からコンビニに行きたい」と話しすぐ行動に移した。このことは、個別活動の心の拠り所とし、SCの存在を安全地帯もしくは本人が隠れる壁として同行した。この経験は本人に大きな充足感と自信をもつことができたと思われる。その後、「絵日記はもう飽きたから書かない」「宿題は数学だけでいい」と話し、自分の意思をはっきり伝えることができるようになった。#14の行動の獲得は#15では本人は早朝5:30に犬と一緒にスーパーに買い物に行くことにつながったと考えられる。家族は本人の行動に対して褒め、焦らず見守る姿勢を心掛けた。このようなことから、本人は家族のためになんらかの役割を果たせたことと、他者のいる外へ出ることによる達成感を得ることができたと考えられる。

以上のことから、本事例の相談過程では本人の状態を考慮しながら相談を行っていった。SCは訪問において宿題やプリント配布など、担任の代わりを一部担っており、様々な役割が求められた。このことから、これからのSCには相談業務だけではなく臨床事例に合わせた臨機応変な対応が必要であろう。ステップアップ訓練・自宅外の活動では、外出訓練や単独行動訓練など現状から一歩踏み込んだ取り組みを実施し、本人は葛藤がありながらも行動を獲得していった。このような取り組みができた背景には、本人の心の踏ん切りや勇気があり、そこに至るまでのエネルギーの充満、タイミングなど様々な要素が合わさっている。そして家族と支援者の見守りも一因であると考えられる。

2. まとめ

本事例は、新ガイドラインでいう医療関連において確定診断がなされる前に相談や支援を行う期間に位置づけられる。本人と家族の相談過程において、ひきこもり当事者と家族がそれぞれ目的・目標を持ち、他者の介入を受け入れることで支援は前進していった。

本人は相談を行っていくうちに、現実を認識し、今の自分にできることを選択して行動に移すことができるようになっていった。家族は本人のそのような状態を把握し家族関係を見つめ直し、焦らず見守る姿勢で支援していった。このことからお互いに現状を変えたいという気持ちから支援が発展し、家族間のコミュニケーションの再構築につながったと考えられる。SCは両者の関係を見ながら、家族間の関係がスムーズになるよう相談を行い、本人や家族の様子を学校に報告し、学校とのつながりを断たないよう配慮して連携していった。このようなことから、義務教育時の不登校からひきこもりへ移行した場合、ひきこもり当事者や家族への訪問における相談はSCであっても対応は可能であり、SC業務において新たな展望であると思われる。以上のことから、当初の目的と目標は一定の効果が得られたと考えられる。

3. 今後の課題

本事例ではひきこもり当事者と家族への相談過程を述べたが、ひきこもり生徒は、一時期に順調でも行動変容が起りやすく不安定であり、長期に渡って支援を必要とする。今回の対応としてSCが関わりを主導してきたが、SCは学校の正規職員ではなく、週2日1日4時間の面接勤務時間から訪問活動（アウトリーチ）の時間を割りさいていくのは厳しい状況であった。また、SCの継続勤務年数は各学校約3年間で移動になることから現在の支援は別のSCが引き継いでおり、今のところ本人は登校できるまでには至っていないが、散歩や近くのスーパー・コンビニに出歩くことはでき、現状維持の状態が続いている。

このようなことから、支援はまだ入り口に迫りついていたところであり長期的な支援を視野にいれていかなくはならない。また今後、SCが訪問活動（アウトリーチ）を実施する際には、SCの勤務時間・日数等の議論が必要である。

今後の課題としては、①小・中学校の不登校ひきこもり支援ノート（仮名）を活用し長期ひきこもりに備える、②主な役割をSCから、医師、担任や養護教員らへの移行、③学校相談室（カウンセリング

ルーム）および保健室へ登校を目指す、④義務教育後の地域支援機関との連携を行う、こととする。そのために病気や発達障害等の確認と受診のため医療機関との連携をし、不登校ひきこもり支援ノートを作成してチームワークを組み対応に臨むべきである。また、不登校ひきこもりコーディネーター（仮名）を各区配置し、各学校に配置のSCからの情報をまとめ、訪問活動（アウトリーチ）を中心に学校との連携を図り、場合によっては病院や発達教育センターなどの相談機関につなげることも提案する。さらにSCの訪問活動（アウトリーチ）の技量として、SCは相談のみに留まらず、福祉分野の訪問を参考にすることも一案である。また、マニュアルを作成し、研修会等で技量の育成向上を図るべきである。特にひきこもり者は対人恐怖、強迫症状を抱えているケースが多くあり、症状悪化防止のためにも初期対応と予防活動を行うことが早期解決の糸口になると考える。

引用文献

- Asuka Koyama, Yuko Miyake, Norito Kawakami, et al. (2010). Lifetime prevalence, psychiatric comorbidity and demographic correlates of "hikikomori" in a community population in Japan. *Psychiatry Research*, 176, 69-74.
- 池上正樹. (2010). ドキュメントひきこもり「長期化」と「高齢化」の実態. 宝島社新書.
- 伊藤順一郎. (2003a). 10代・20代を中心とした「ひきこもり」をめぐる地域精神保健活動のガイドライン. こころの健康科学研究事業.
- 伊藤順一郎. (2003b). 「社会的ひきこもり」に関する相談・援助状況実態調査報告（ガイドライン公開版）.
- 木曾俊介・堅物和夫・小松順平・倉本英彦. (2001). 不登校・引きこもりの若者に対する社会参加支援活動の試み—小グループによる清掃アルバイト実践を中心に—. 研究助成論文集, 37, 231-237.
- 近藤直司編著. (2001). ひきこもりケースの家族援助相談・治療・予防. 金剛出版.
- 厚生労働省. (2010). ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン（新ガイドライン）.
- 工藤定次. (1997). おーい、ひきこもりそろそろ外へ出てみようぜ タメ塾の本. ポット出版.
- 工藤定次・齋藤環. (2001). 「激論！ひきこもり」. ポット出版.
- 黒水るみこ. (2011) 引きこもり生徒の対応について—スクールカウンセラーとしてどこまで関与ができるのか—. 日本心理臨床学会第30回大会論文集, 185.

- 長坂正文. (1997) 登校拒否への訪問面接. 心理臨床学研究, 15 (3), 237-248.
- 齊藤万比古. (2000). 不登校の病院内中学校卒業後10年間の進路研究. 児童青年医学とその近接領域, 41(4), 377-399.
- 齊藤万比古. (2003). 子供の攻撃性と脆弱性, 不登校, ひきこもりを中心に. 児童青年医学とその近接領域, 44(2), 136-148.
- 齊藤万比古. (2007). 思春期のひきこもりをもたらし精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究. 厚生労働省科学研究費補助金こころの健康科学研究事業.
- 齋藤敏靖. (2004). 新潟県内の保健所における引きこもり家庭教室について. 新潟青陵大学紀要, 4, 91-97.
- 齋藤環. (1999). 社会的ひきこもりー終わらない思春期ー. PHP 新書.
- 齋藤環. (2002). 「ひきこもり」救出マニュアル. PHP 新書.
- 竹中哲夫. (2007). ひきこもる人のニーズの多様性と社会的支援. 日本福祉大学社会福祉論集, 117, 1-20.
- 田嶋誠一. (2001). 不登校・ひきこもり生徒への家庭訪問の実際と留意点. 臨床心理学, 1 (2), 202-214.
- 山本耕平. (2004). 社会的ひきこもり支援研究序説ー精神保健福祉実践の支援観と目的をめぐってー. 大阪体育大学健康福祉学部研究紀要 創刊号, 99-112.

謝辞

本事例を作成するにあたり, 当事者や保護者の方, A中学校の関係者の先生方に多分なご協力と掲載許可を快くいただくとともに, A中学校からたくさんのお情報をいただきました。厚くお礼申しあげます。